

古典の日

奥の細道

松尾芭蕉

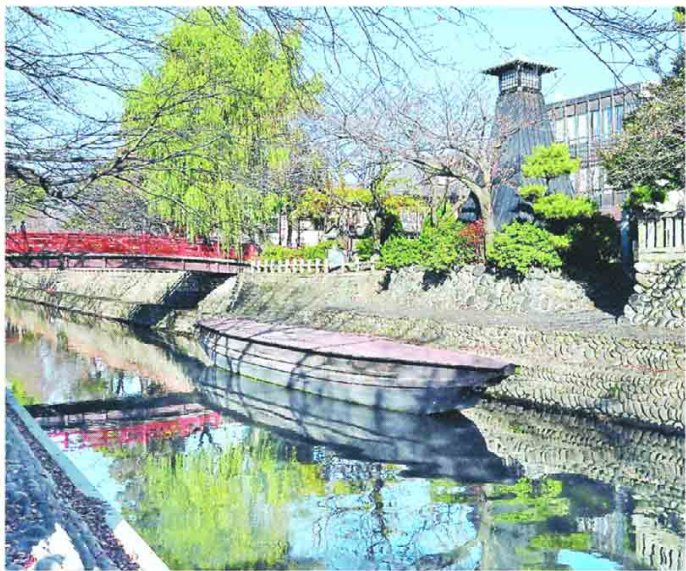
二十五

大垣



露通もこのみなと迄出むかひて、ミの、国へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入れば、曾良も伊勢より来り合、越人も馬をとばせて、女行が家に入集る。前川子・荆口父子、其外したしき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふがごとく、且よるこび、且いたはる。旅のものうさも、いまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の迂宮おがまんと、又ふねに乗て、

蛤のふたみに別行秋ぞ



おくのほそ道の結びの地となる住吉燈台と船町港跡(岐阜県大垣市)

新編日本古典文学全集第71巻・松尾芭蕉集②『紀行・日記・俳文・連句編』(小学館刊)から転載。校注者・井本農一、久富哲雄

芳賀徹さん とたずねる

おくのほそ道

25

芭蕉は色の浜の舟遊びをした日の翌日(八月十七日、陽曆九月三十日)あたりで敦賀を立ったのだらう。等哉と別れ、代りに齋部路通という一風変わった僧形の門人が迎えに来てくれた。六日前に敦賀を出た曾良は木之下、彦根、関ヶ原に泊って四日目に大垣に着いているから、芭蕉もほぼ同じ旅程で八月二十一日には「おくのほそ道」の終着点、大垣に入っていたのだらう。

大垣では、曾良による先触れもあって、近藤知行ら大垣藩士や名古屋の紺屋越智屋人をはじめ十人近くの門人が次々に集まって、師の長旅の完了を、且まじくこび、且いたはってくれた。三月二十七日の江戸立以来約五ヶ月の、約六百里(二四〇〇キロ)に及ぶ俳諧研鑽と俳諧教導の大旅行を終えたのだから、彼らが生き返った死人に再会するようないきなり師を歓迎したというのも、もつともまた、彼らとは十四、五日の大垣逗留中にさまざま句会を催したのだが、芭蕉はここではそれへの言及を一切省略した。九月六日(十月十八日)、伊勢の遷宮拝観のために再び旅立った日の別離の一句「蛤のふたみに別行秋ぞ」を記したのみで、この俳諧紀行も終るのである。

別れ行く秋—芭蕉惜別

蛤の蓋と身に二見が浦を掛け合わせ、さらに「見る」の意味まで重ねて、別れ難い別れを言う。あまりにも技巧的な凝縮表現とも見えるが、「別れ行く秋ぞ」が、またも繰り返される別離の悲哀を季節の推移の悲しみのうちに把え、あわせて旅への意志の強さを伝えて、いさぎよい。この句が『ほそ道冒頭の「行く春や鳥啼き魚の目は泪」とひそかに確かに呼応していることは先学たちの指摘するところだ。昨秋十月以来半年、芭蕉とともに「おくのほそ道」をたどつてこの最終章に来ると、さすがに私たちが「蛤の蓋身に別る」が、ごとき惜別の思いを禁じえない。最後にこの読書を通して得た古典「ほそ道」のめざましい印象をいくつか、くく簡略に列挙してみよう。

(一)和文脈を基体とし、そこに典雅ある漢語、とくに漢語の対句を投じた硬軟交錯の、密度高い緊張した散文の勢い、その魅力。(二)その散文の進行によって加庄された詩的エネルギーを、一拍の間を置いて噴出させ昇華させる発句の鮮やかなリアリティな効果。(三)歌枕としての和歌や日本史上の人物のみならず、中国の漢詩伝承をも自在に参照して織りなす古典的遠景の四重奏の重層性(四人間の生運命と歴史、またそれらを包摂する天地山川の原始の力の動きに対する詩人の、真向からの感受と把握の力強さ、それを表現する語彙の強さと修辭の洗練)。(五)蕉風俳諧の教導と普及にかけける芭蕉の熱意と真摯さ。それに対する東北・北陸の俳人、俳句好きの四民の信頼と敬愛の念のひたむきさ。(六)元禄期の日本がすでに達成していた「徳川の平和」の円熟ぶり。



古典文学・文化を広めようと、古典の日推進委員会は11月1日を「古典の日」と定めた。

書物に生を実感、満ちる心

学生時代「生、老、病、死」について仲間と語り合ったが、答えが見つからずにそのまま海軍に入隊。二年ばかり飛行機乗り、即ち搭乗員として厳しい訓練を毎日のように受けました。その時、学生時代に読

古典と私

んだ倉田百三著「出家とその弟子」や万葉集の防人の歌などを想い出し、

裏千家前家元 千玄室 さん



心の慰みとしたのです。主計科の隊長の「学生出身の士官だから、本を読みたければ思想関係

以外の本なら図書室に揃えてやるから、読みたいものを申し出てよろしい」との恩情に甘え、万葉集や森鷗外や田山花袋の本などを申し出ました。

「奥の細道」「古典と私」「文学ウォーク」は今回で終わり、4月からは京都学園大教授・山本淳子さんの「枕草子はおもしろい」、俳人・坪内稔典さんの「ねんてん先生の575」を始めます。

使門が見え、清々しい気持ちになります。奥にある開山堂には光厳法皇の木像が安置されています。光厳法皇は南朝方面の幽閉後、夢窓疎石の宗教により出家。この地を終の住処とされました。「太平記」には法皇が崩御した時の様子について、「仙洞御所では百官が参列するが、ここでは鳥が空しく鳴いて挽歌を響かせ、松が風に鳴って悲しみを奏でる中で、わずかの身内の者により葬儀が執り行われた」と記されています。(NPO法人・都草 中野 昭文)



常照皇寺の庭園の桜(京都市右京区)一昨春撮影

常照皇寺と光厳法皇

文学ウォーク

京都市右京区(旧京北町)の常照皇寺は、約60年間続いた南北朝時代の動乱に翻弄された光厳法皇が、出家後に草庵を結んだという地に建立された禅寺です。市中からやや離れていますが、山寺の静かな雰囲気求めて多くの人々が訪れます。参道は一幅の絵のような趣があります。特に春は国の天然記念物で法皇御手植えと伝わる「九重桜」、御所から株分けされたという「左近の桜」、後水尾天皇が思わず御車を返したという「御車返しの桜」、などが知られています。深い木立の中の緩やかな坂を登り、山門をくぐると、左手の庫裏の玄関に着きます。無人の受付で志納金を納めて参拝。明るく開放的な方丈に座ると、庭園や勅

親しむ

うまい!を明日へ!プロジェクト

スーパードライ1本につき1円が文化財の保全などに活用されます。

京都府のみなさまの「うまい!」が、文化財の保全活動に!

アサヒビールは、京都府内で販売した「アサヒスーパードライ」対象商品 1本につき1円を「文化財を守り伝える京都府基金」に寄付し、京都の貴重な文化財の保存修理や保全活動にお役立ていただきます。

対象商品 平成22年3月上旬から平成22年4月下旬に製造した「アサヒスーパードライ」缶500ml・缶350ml・大びん・中びん。 www.superdry.jp

第2弾 結果報告

平成21年秋に実施した「うまい!を明日へ!」プロジェクト第2弾では、1,016万8,363本のご愛飲をいただきました。1本につき1円、合計1,016万8,363円を、文化財の保全活動にお役立ていただきます。